

もぬけの殻も同然

空襲後、外郭を残して完全に焼けてしまった市役所では、八幡国民学校前の防空壕などに臨時の市役所を設けて、焼け残った町内会に炊き出しを依頼し、乾パンその他の応急配給などを行った。しかし家を失った市民は親せきなどを求めて市外へ市外へと逃避し、そうでもない者も第二回、第三回の空襲必至の声に脅かされて、避難する者が続出した。このようにして人口は日増しに減っていった。しかし避難する所もない罹災者は焼け残った縁辺を頼り、それもない者は防空壕や寺院に雑居し、焼け跡から掘り出した鍋や釜、食器などを使ってわずかな食事を取った。市民はその日その日をいかにして食べ、いかにして寝るかで精一杯であった。この間に各都市が次々に空襲され、

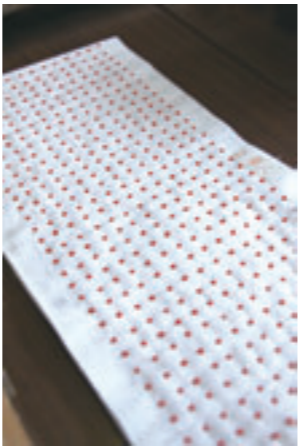


旧佐世保市役所玄関跡
佐世保空襲で骨組みを残して焼けたが、その後も機能を果たしてきた市役所旧庁舎。昭和48年に解体される際、玄関の一部と平和記念像が中央公園（市民会館前バス付近）に移設された。

8月6日には広島に、9日には長崎に原子爆弾が投下され、数十万人の人々が一瞬にして生命を亡くした。一方ソ連も日本に戦争を宣言し、旧満州（現中国東北部）に侵入した。ポツダム宣言を受諾するか、一億玉砕か、政府内でも議論が対立し、容易には決められなかったが、14日、無条件降伏することが決められ、15日、天皇陛下自らのラジオ放送となった。この放送は雑音が多くて聞き取りにくく、その意味がはっきりと分からなかった。こうした土壇場に追い込まれてもなお、市民の多くは必勝を信じ、敵兵の一人も本土に上陸していないとあっては降伏など思いもよらなかった。したがって、この放送を敵の偽りの放送として信じようとしなかったが、ラジオの再放送を聞き、新聞社の号外を見、その後次第に伝わってくる情報を聞くうちに降伏が本当のことであることが分かってきた。市民はこぶしを握って泣き、張り詰めた力が一時に抜けていくのを感じた。そうした中、佐世保上空にB29が飛んできた。しかし空襲警報も鳴らなければ、高射砲も鳴らなかった。市民には初めて敗戦感がしみじみと身に染み感じられた。敗戦の悲しみと同時に、



被災地跡に当座しのぎのバラックが建ち並ぶ市役所付近。9月23日撮影。写真提供／芸文堂



千人針
一片の布に千人の女性が赤糸で一針ずつ縫って千個の縫玉を作り、出征将兵の武運長久・安泰を祈願して贈ったもの（佐世保空襲資料室蔵）。

一種の虚脱感が全市民を覆った。しかし、そうした中にも何となく戦争の重苦しい圧迫感から解放された安心感で、ほっとした空気がみなぎっていた。

その後も海軍の解体で佐世保を去る者、連合軍の進駐に対するさまざまな噂やデマにおびえて佐世保から逃げ出す者など、毎日のように市からの人口

流出が続いた。食糧難や住宅難も大きな原因であった。そして空襲前まで30万人とも言われた市の人口は、この年の終わりには一挙に14万人余りとなった。海軍によって生まれ、海軍によって発展した佐世保は、その支柱となる海軍を失っては、もぬけの殻も同然となった。

連合軍の佐世保進駐

佐世保をはじめ九州各地に進駐する連合軍部隊は、第六軍管轄下の第五海兵団を主力とする米軍であった。9月、連合軍は佐世保進駐の前に沿岸や航路の機雷除去（掃海）を行った。その後、市は進駐に備えるため、鎮守府と協力して終戦事務連絡委員会を設置した。

9月22日午前7時、約5万人規模の佐世保進駐が行われた。佐世保に姿を現した連合軍の艦隊は、水陸両用の上陸用舟艇その他の新兵器を使用して、工廠岸壁、前畑などから上陸を開始し、市民が恐怖と好奇の眼で見守る中を、佐世保、相浦の両海兵団や、重砲兵連隊および山ノ田、大野、福石などの工員宿舎に進駐した。

進駐に当たっては、町内会を通して市から市民に心構えの指導があり、市民は家の戸を閉じ、外出を控えて、進駐を見守った。そのため心配された連合軍の進駐も平穩のうちに終わった。ともあれ、この進駐によって佐世保はいよいよ占領軍の支配下に置かれることになり、軍の命令は佐世保連絡委員会を通じて次々に市民に伝えられることになった。



米軍の佐世保進駐。矢岳方面へ向かっている。写真提供／芸文堂



矢岳を通り250トンクレーンの見える今福町付近を行進する米軍。写真提供／芸文堂